

「海に見える街」 での分娩再開

小樽市医師会
社会福祉法人北海道社会事業協会 小樽病院

黒田 敬史

宮崎駿監督の『魔女の宅急便』という映画はご存知だろう。13歳の春の満月の夜、魔法使いのキキが修行のため家を出て、翌朝に貨物列車の中で目を覚まし、青い海の湾岸に栄えた風情ある街が視界に広がった時に流れるBGMが久石譲作曲「海に見える街」だ。10年ぶりに再度赴任して来た小樽。アジア人観光客が急増した印象はあるが、この情緒ある街から溢れるイメージは何も変わらない。ただ大きく変わったのは、10年前たくさんのお産に恵まれた小樽協会病院が、3年に渡りお産を閉ざしていたことだ。

小樽協会病院の分娩業務休止を聞いたのは4年前。これは同時に広い後志地方に地域周産期センターが一つも機能していないことを意味する。主な原因である産婦人科医不足は依然として根深い問題だが、人の住む街に産声が上がるといふ光景がもはや当たり前でない時代なのだと思いついた時、やるせなさにも恥ずかしさにも似た複雑な感情を抱いたことを今でも覚えている。

平成29年12月の協定で、小樽・余市などの後志北部6市町村の支援、札幌医大産婦人科の医師派遣のもと、平成30年度の小樽協会病院の分娩再開が約束された。妊婦の外来受け入れの調整や、「陣痛・分娩・産後」を一室で過ごせる分娩室「LDR」の工事計画などが着々と進められた。4月、勤務初日の外来に初診の妊婦さんが朝一番に2人待っていていたり、乗せた客が産婦人科医とも知らずタクシー運転手さんが「いやー、協会でやっとお産再開だってよ、いがあったいがあった！」と言ってくれたり、験担ぎで始めたお神輿担ぎでもたくさんの応援をいただいたり、生活の中で市民に背中を押される温もりをひしひしと感じた。

6月下旬に分娩予定者が正期産（妊娠37週）に入ったのと同時に分娩受け入れ体制を再開。そして7月中旬、ついに分娩再開後第1号となる赤ちゃんの産声を聞いた。歓喜に浸る暇もなく、病棟は久々のお産とベビーの対応に大忙しだった。幸ある病棟に戻ったことを実感したのは、産後数日経って産婦さんの部屋へ回診し、母子の写真を撮影したときだったように思う。尊い赤ちゃんが、再びここで生まれた。

しかし、いつまでも喜んでばかりはいられない。地域のニーズを鑑みて2019年春から分娩数制限を解除したとはいえ、まだまだ地域周産期センターとしての責務を果たすための課題が山積している。最大の懸案は、助産師が依然として決定的に不足していることだ。限られた助産師の献身で成り立っている現状から早く脱しなければいけない。また再開業務に関わると意を決して働きに来てくれる助産師にとって、たとえお産が少なくとも常に学べる環境であるために、正常・異常分娩のシミュレーション教育を分娩再開前から積極的に取り入れている。これは臨床研修医への医学教育や医療安全の側面からも予想以上に効果が高いことが分かった。他には、後志で初めて救急隊員を集めての周産期救急講習会を開催したり、病院企画の市民公開講座「ふれあい健康教室」では「安全なお産のためにできること」と題して市民が街全体で妊婦の安心を考えるための問題提起をしたりと、妊婦さんにとって安全・安心な環境づくりの草の根活動にもチャレンジしている。これからもいつか実を結ぶと信じて続けようと思う。

分娩再開という業務は、産婦人科医だけではこんなにもまっすぐ飛んでくれないものかこの一年で思い知らされた。病棟・外来スタッフ、小児科、麻酔科、手術室をはじめ、多くの職員、市民の方の尽力と応援があつて、なんとかやっとならぶら飛び出したばかりだ。必死にこらえている今より、いつかみんながほんの少し力を抜いても気持ちよく海の街で飛んでくれるよう、そしてもう二度と遠くへ飛ばされぬよう、どうか温かく見守ってほしいと願う。

